令和 7年 1月

日本科学未来館イベント「こどもからみる不思議世界探求」
にご参加いただいた皆様へ

2024 年 12月 7–15 日に上記イベントにご参加いただき、誠にありがとうございました。多くのお子さんとその保護者の方に参加協力をいただき、大変貴重なデータを得ることができました。心より感謝いたします。

ここでは須藤の担当した「多様な他者をどう捉える？」というテーマの心理学実験について、基礎的なデータ解析が終わりましたので、参加された皆様全体の傾向について報告します。

研究実施者：須藤美織子（一橋大学）
E-mail: mioko.sudo@r.hit-u.ac.jp
研究統括者：山口真美（中央大学）

研究概要

現代社会では、異なる背景を持つ人々と接する機会が増えており、互いの違いを尊重しつつ、各自の強みを活かすことが一層重要とされています。本研究では、他者理解が形成される大切な時期である幼少期に、異なる文化や性別の相手を子どもがどのように認識し、関係を築くのかを調べるため、3つの研究課題を実施しました。

研究課題①：「この子は知っている？クイズ」

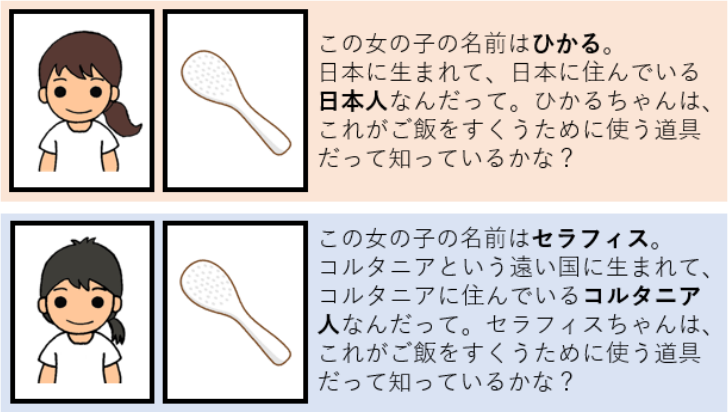

図1.「この子は知っている？クイズ」の問題例。

「この子は知っている？クイズ」では、まずお子さんに日本出身の子どもと、遠い架空の国コルタニア出身の子どもを紹介し、それぞれが「しゃもじはご飯をすくうために使う道具」などといった日本文化に関する知識を持っているかどうかを予測してもらいました（図1）。さらに、お子さんがコルタニアの文化について学ぶことで、回答がどのように変化するかも調査しました。ここで、コルタニア文化について「日本とは全く違う」（全く異なる道具、服、食べ物、遊びがある）と学んだお子さんと、「日本にとても似ている」（同じような道具、服、食べ物、遊びがある）と学んだお子さんがいました。

結果として、コルタニア文化について学ぶ前、つまりコルタニアが遠い国であるという情報だけを知っている段階では、コルタニア出身の子どもが日本文化の知識を持っている可能性は日本出身の子どもに比べて低いと予測されました（図2）。さらに、学んだコルタニア文

化の内容に応じて、その予測に変化が見られました。具体的には、コルタニア文化が日本文化と異なると学んだ場合には、コルタニア出身の子どもが日本文化に関する知識を持っていると予測される度合いがさらに低くなり、逆に日本文化に似ていると学んだ場合には、その度合いが高くなる傾向がありました。

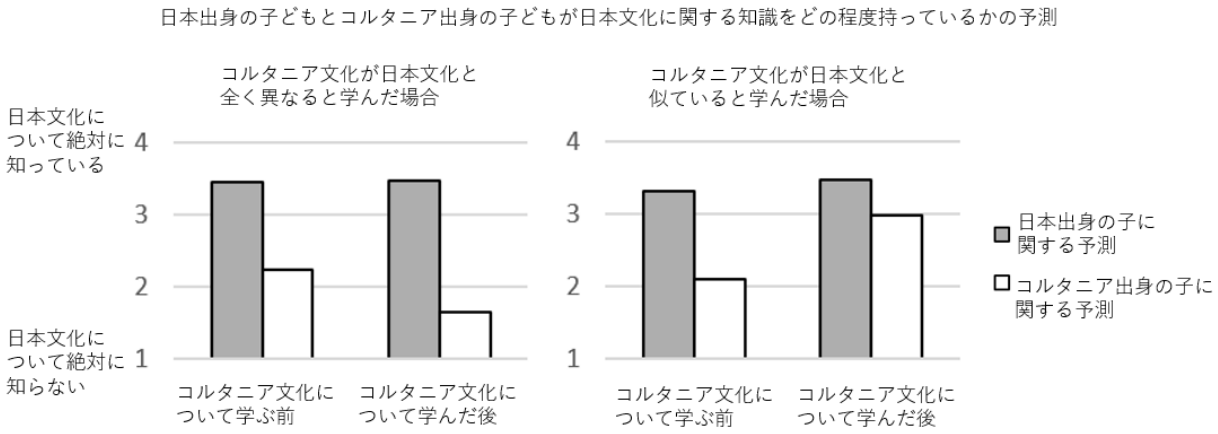

図2.「この子は知っている？クイズ」における回答の平均傾向。

研究課題②：「誰がお友達かな」

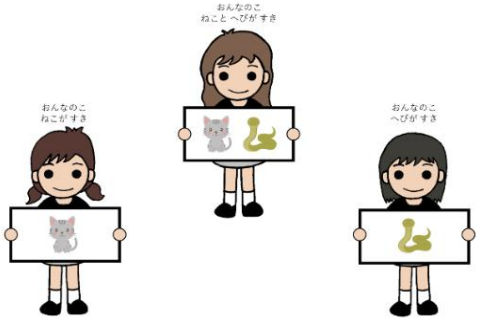

図3.「誰がお友達かな」の問題例。

「誰がお友達かな」というパソコン課題では、お子さんに3人の子どものイラストを見ていただき、中央の子が「多くの子どもに好かれているもの（例：猫）」と「あまり好かれていないもの（例：蛇）」の両方を好む一方、左右の子はどちらか一方だけを好むという状況を提示しました（図3）。その上で、中央の子が左右どちらの子と友達か推測していただきました。さらに、パソコン課題で示された「猫」や「蛇」といった好みについて、それがどのくらい多くの子どもに好まれているか、つまりどの程度「一般的」な好みであるかを評価してもらいました。

結果として、より一般的だと考えられる好みを共有する子ども同士が、友達になりやすいと推測される傾向が見られました（図4）。たとえば、例にある「猫」が「蛇」よりも多くの子どもに好まれていると考えたお子さんは、「猫好き」の共通点を持つ左の子を、中央の子の友達として選ぶ傾向がありました。特殊な好みの一致による友人関係は、価値観の一致で親密さが増す一方、共有範囲が狭いため疎外感の原因にもなり得ます。したがって、孤立を避けるために、より一般的な好みに基づいて友人関係を築く方が望ましいと判断される可能性が考えられます。

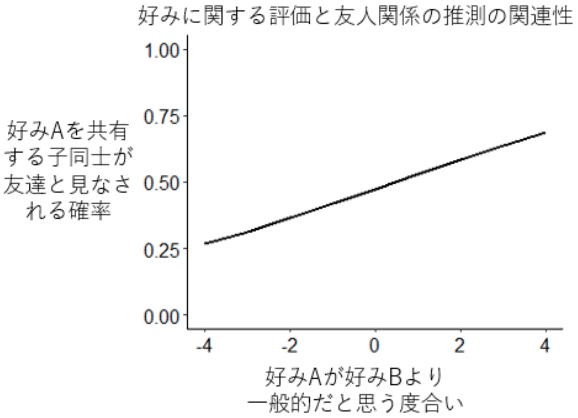

図4.「誰がお友達かな」における回答の平均傾向。

研究課題③：「スターブライト」

図5.「スターブライト」のゲーム用紙。

「スターブライト」という課題では、お子さんに8枚のシールを渡し、それらを「自分」「性別・人種が同じ子ども（以下、似ている子ども）」「性別・人種が異なる子ども（以下、似ていない子ども）」の3人にどのように分配するかを検討してもらいました（図5）。この課題は、お子さんが自分と共通点のある子どもを優遇してシールを多く配るのか、それとも公平に分配するのかを調べていました。

結果として、約66%のお子さんが、似ている子どもと似ていない子どもに同じ枚数のシールを渡しました。特に、自分には2枚、残る2人にはそれぞれ3枚ずつという分配をするケースが多かったのが特徴的です。一方、似ている子どもと似ていない子どもに同じ枚数のシールを渡さなかった場合は、似ている子どもにより多く与える傾向（約26%）の方が、似ていない子どもを優遇する傾向（約8%）よりも高いことが明らかになりました。

本研究の主な目的は、子どもが異なる背景を持つ他者とどのように関わりを持つかについて理解を深めることです。本研究の結果を基に、多様な社会における友好関係の構築や、幼少期からの円滑なコミュニケーション促進の方法をさらに検討してまいります。